

令和 5 年 6 月 28 日現在

機関番号：14303

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2022

課題番号：20K04903

研究課題名（和文）豊臣政権による寺社造営とその技術・体制に関する建築史的研究

研究課題名（英文）The study of the religious building construction by the Toyotomi regime and its characteristics

研究代表者

登谷 伸宏（Toya, Nobuhiro）

京都工芸繊維大学・デザイン・建築学系・准教授

研究者番号：40447909

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、豊臣政権による寺社造営に注目し、基本的な事実関係を明らかにするとともに、その特質を解明することを目的とした。さらに、中近世移行期における寺社建築の変容（＝近世化）に関する理論の構築を目指した。本研究の成果としては以下の点が挙げられる。豊臣政権、とりわけ豊臣秀吉が行った寺社造営に関する事実関係を整理し、その全容を把握したこと、豊臣秀吉による大仏殿造営の特質を、そこで用いられた工法、造営組織の編成といった側面から明らかにしたこと、中近世移行期に造営された寺院建築について、平面形式、構造形式、意匠の特質を明らかにしたことである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

寺社建築の近世化を考える上で、豊臣政権による寺社造営の実態を明らかにすることは、重要な課題のひとつであった。だが、これまで建築史の分野では豊臣政権の寺社造営について本格的に論じた研究はほとんどなかった。また、寺社建築の近世化についての理論構築も行われた来なかった。そのなかで、本研究課題では、豊臣政権の寺社造営や寺社建築の近世化について考察を加え、その特質の一端を明らかにすることができた。そこに、本研究の成果の学術的意義がある。また、こうした研究成果は、近世の寺社建築の文化財としての評価に大きく関わるものであり、そこに社会的な意義があるといえよう。

研究成果の概要（英文）：This study focused on the construction of religious buildings by the Toyotomi regime, and aimed to organize its facts and characteristics. Furthermore, it is aimed to construct the theory of the religious building transformation in the transitional period between the medieval and premodern period. The results of this study include the following points. 1) To organize the facts related to the religious building construction by the Toyotomi regime, especially by Hideyoshi Toyotomi. 2) To reveal the characteristics of the Higashiyama great buddha hall construction by Hideyoshi. 3) To clarify the characteristics of the plan, structure, and design of temple buildings constructed in the transitional period between the medieval and premodern period.

研究分野：日本建築史

キーワード：寺社建築 造営 豊臣政権 造営組織

## 1. 研究開始当初の背景

現在、建築史分野において、中近世移行期の寺社建築の変化を連続的に描いた研究は、浄土宗・浄土真宗などいわゆる鎌倉新仏教諸宗派の建築に関するものを除くと、非常に限られている。たとえば、近年著された日本建築史の通史をみても、中近世移行期については織豊政権による大寺社の復興、その過程における復古的様式の採用、意匠・構造の城郭の造営との類似性などのトピックを挙げ、数少ない事例によりながら説明するにとどまっている。

また、中近世移行期における寺社建築の造営体制や組織については、永井規男氏の研究が貴重な成果として挙げられるが、概説にとどまる部分も多く、永井氏の指摘をより実証的に検討していく必要がある。

すなわち、中近世移行期において、寺社建築が意匠・構造・技術、さらにそれらの造営を担った造営組織などの点でどのように変化したのかについては、近世以降の寺社建築の特質を理解する上で解明が必要不可欠でありながら、基本的な事実関係の確定を含めて研究の蓄積が不十分であり、その変化を総体的に描くまでには至っていないといえよう。

そのなかで、筆者は豊臣秀吉の行った京都の近世城下町化、いわゆる京都改造の一環として造営された東山大仏殿 (= 方広寺) に注目し、大仏殿造営の特質・意義について考察した。その結果として、秀吉政権の大仏殿造営の特徴として以下の諸点を確認した。

中途から造営を主導した木食応其のもと、木材を伐採現場で部材へと加工するプレファブリケーション工法を大規模に採用したこと。

諸国から大量に動員した工匠を、技倆にもとづき造営組織として編成し、現場へ投入したこと。

同時期に進められた権門寺社の復興において、立て登せ柱などの技法を幅広く導入するとともに、巧妙で迅速な堂舎の修理、他寺社からの堂舎移築という手法を広範に用いたこと。

そして、かかる技法・工法は中世の寺社建築やその造営にみられるものの、豊臣政権が行った寺社造営の大きな特徴となるものであると結論づけた。さらに、豊臣政権による寺社造営は、天正期から慶長期にかけて畿内を中心として広範に進められ、多くの寺社建築が建てられたことをふまえるならば、中近世移行期における寺社建築の変化を理解する上でひとつの画期となり得るのではないかと仮説を立てることとした。

## 2. 研究の目的

本研究では、以上の研究状況と課題をふまえ、豊臣政権による寺社造営の特質を明らかにするとともに、それを通じて中近世移行期における寺社建築の変化の具体相の一端を論じるため、以下の3つの課題について検討することとした。

### (1) 豊臣政権の寺社造営に関する事実関係の整理

本研究では、豊臣政権による寺社造営について事実関係を解明することを目的とする。豊臣政権のうち、秀頼政権の寺社造営に関しては先行研究でも整理が行われており、概要が判明している。だが、秀吉政権の寺社造営に関しては、現存遺構が少ないこともあり、事実関係がほとんど明らかとなっていない。そこで、本研究では秀吉政権を中心に豊臣政権の寺社造営の事例を、文化財建造物の修理工事報告書、自治体史、文献史料や金石文などを用いて年代ごとに整理し、その全容の解明を目指す。

### (2) 豊臣政権による寺社造営の特質

秀吉政権の東山大仏殿の造営においては、上述のように、プレファブリケーション工法の大がかりな採用、技倆にもとづく造営組織の編成に大きな特徴がみられた。本研究では、こうした大仏殿造営に用いられた工法や、造営組織の編成の特徴についてより詳細にみていくとともに、その後の豊臣政権の寺社造営にそれらがいかに採用されていったのかを明らかにする。

また、豊臣政権の大規模な寺社造営の特質を明らかにするにあたっては、造営に用いる材木をどのように調達したのかを検討する必要がある。そこで、本研究では大仏殿の造営を中心として、豊臣政権の材木調達の実態についても分析を加えることとする。

### (3) 中近世移行期における寺社建築の変容 (= 近世化) に関する理論構築

中近世移行期に各地で行われた寺社造営の事例を修理工事報告書、自治体史、古文書・古記録から収集・整理・分析し、中近世移行期における寺社建築の変容 (= 近世化) を平面形式・構造形式・意匠などの点から明らかにする。さらに、それを豊臣政権の造営した寺社建築と比較することによって、その特質や意義をより広い視野から論じるとともに、中近世移行期における寺社建築の変容 (= 近世化) に関する理論の構築を目指す。

### 3. 研究の方法

本研究では、豊臣政権の進めた寺社造営を中心として、上述の論点(1)～(3)について検討を行った。その際には以下の手順により研究を進めた。

まず、豊臣政権の寺社造営に関する先行研究を改めて分析し、先行研究の成果と課題を洗い出した。ついで、『豊臣秀吉文書集』や各自治体の発行した自治体史を利用して史料の収集を行うとともに、各地域の図書館・博物館などの史料所蔵機関においても、文献史料・絵画史料の調査・収集を進めた。さらに、必要に応じて豊臣政権の造営した寺社建築の現地調査を行った。

その一方で、中近世移行期における寺社造営をより広い視野から理解するために、当該期に造営された寺社建築の建築的特徴、中世・近世の政治・社会構造、信仰のあり方などを、建築史学・文献史学・考古学の成果をもとに整理した。

また、以上の作業を通して得られた情報をデータとしてPCに入力し、研究支援データベースの構築を行った。

### 4. 研究成果

本研究では、3で述べた方法により研究を進めることにより、以下にみるような研究成果を得ることができた。

#### (1) 秀吉政権と東山大仏殿の造営

本研究では、豊臣秀吉による東山大仏殿の造営について、造営過程の再検討を行うとともに、造営組織、および造営に用いられた工法の特徴を解明した。さらに、それらがその後の豊臣政権の寺社造営に及ぼした影響についても論じた。

大仏殿造営過程の再検討 従来、豊臣秀吉による大仏殿の造営は、高野山の客僧であった木食応其により進められたと考えられてきた。しかし、当初大仏殿の造営を担ったのは秀吉の弟の豊臣秀長であった。さらに、大仏殿の具体的な造営計画は豊臣政権の工匠と、秀長が所領から動員した大和国・紀伊国により進められるとともに、各地の大名を動員して材木調達や敷地の造成が行われた。天正19年(1591)に秀長が死去したことを受けて、秀吉政権のなかでは前田玄以・長束正家・木下吉隆が造営全体を担うこととなり、大仏殿など伽藍中心部の造営のみは木食応其が統轄することとなった。

このように、大仏殿の造営は通説と異なり、当初は秀長が担い、その死後は全体を前田玄以をはじめとする秀吉政権の奉行衆が引き継ぎ、大仏殿など伽藍中枢を木食応其が統轄する体制へと変化したとすることができる。

大仏殿の造営組織について これまで、大仏殿造営へ参加したことが明らかであった工匠としては、棟梁司を務めたとされる大和国法隆寺の大工であった中井正吉、のちに江戸幕府に出仕した紀伊国出身の平内吉政が知られていた。本研究では、造営に参加した工匠について分析を加え、より体系的に整理した。

当初、大仏殿の造営は豊臣政権の工匠と、秀長が所領から動員した工匠により担われた。上にあげた中井正吉・平内吉政はいずれも秀長の所領出身であり、秀長に動員された工匠である可能性が高い。その他に、秀長の旧所領である但馬国出身の助左衛門尉という工匠も造営に参加したことが明らかとなった。したがって、大仏殿の造営組織としては、第一に豊臣政権の工匠、とりわけ秀長の所領から動員された工匠により編成されたグループがあったことがわかる。

木食応其は、造営を統轄するにあたって高野山から穀屋の工匠を大量に動員した。さらに、東寺の穀屋からも工匠を参加させており、高野山と東寺の穀屋の工匠が第二のグループとなる。これらのグループの奉行は、高野山行人方と穀屋の聖が務めたと考えられ、奉行を中心とした造営組織を編成していたと思われる。

第三のグループが、秀吉が諸国から動員した工匠である。秀吉は畿内近国に大規模な工匠の動員を命じており、多数の工匠が大仏殿の造営に参加したと考えられる。

木食応其は、技倆により各グループの工匠を格付けし、多くの小規模な造営組織を編成した。そして、それらが大仏殿の造営に投入したとすることができる。造営のなかでいくつかの小規模な造営組織が一棟の建物を分担する法式は、その後の豊臣政権の寺社造営でも使用されており、豊臣政権の寺社造営のひとつの手法として定着したといえよう。また、出自の異なるさまざまな工匠が、技倆により造営組織として編成されることにより、大工技術の平準化も進んだと想定され、それがその後の豊臣政権の寺社造営を支えたと推測される。

#### (2) 豊臣政権による寺社造営の特質

豊臣政権の寺社造営の特質を明らかにする上で、造営に用いた工法の特徴、材木調達の実態を論点として設定し、それぞれについて分析を加えた。

寺社造営の工法について 木食応其が大仏殿造営にあたって採用したのが、材木を伐採地付近において部材まで成形し、それを現場へ運搬し組み立てるプレファブリケーション工法ともいべき工法であった(以下、プレハブ工法とする)。プレハブ工法自体は、中世の寺社造営においても用いられていたことが確認できるが、応其はそれを巨大な大仏殿に採用したことに大きな特徴があるといえよう。その後、プレハブ工法は、豊臣政権の寺社造営においても採用されていった。たとえば、秀頼政権により行われた醍醐寺の上醍醐伽藍における開山堂・五大堂・如意輪堂の造営には、すべてプレハブ工法が採用されたことがすでに指摘されている。本研究で

は、これらの建物の部材がすべて大坂で加工されていること、後述のように、天満に材木市場が開かれていることから、天満が豊臣政権の寺社造営の基地として機能していたことを想定した。

その他にも都久夫須麻神社本殿もプレハブ工法で造営されたことを明らかとした。本殿は、伏見城の御殿、あるいは豊国社社殿を移築したものと考えられているが、いずれにせよ部材に成形され、塗装が行われたのは大仏であったことがわかる。すなわち、大仏もその周辺の建物の部材を成形する基地となっていたとすることができ、豊臣政権の寺社造営において、天満と大仏の2つの基地が大きな役割を果たしていたと考えられる。

材木調達について 豊臣政権が寺社や城郭など大規模な造営を進める上で、材木調達の経路を確保することは非常に重要であったと考えられる。これまでの研究では、豊臣政権は、戦国期までに形成されてきた西国・四国-尼崎、四国-堺という経路に加えて、東国(木曾・富士)から大坂に至る経路を開発したことが明らかとなっている。

本研究では、天正期を中心に材木調達の実態を改めて検討した。その結果、大仏殿造営においては、大名領国で伐り出された材木の運搬を豊臣政権の奉行人が指揮しており、西国・畿内では山口宗長・寺澤広政が重要な役割を果たしていた。一方、東国では古田重勝・石川光吉・早川長政といった奉行人が材木調達を統轄していた。大仏殿の材木は、こうした政権により確保された経路を用いて運搬されたが、木食応其が造営を担うようになると、材木調達の一部を応其が直接指揮し、紀伊国・近江国・伊賀国からも材木が調達された。これらの材木は河川や陸路を用いて淀へ集積され、そこから大仏へと陸送されたことがわかる。さらに、応其は、大坂から淀・鳥羽への材木輸送を天満の商人に担わせたこと、大量の材木を天満の材木屋から購入していることも明らかとなった。このことは、天正11年(1583)から豊臣秀吉が大坂城とその城下町を建設するなかで天満に材木市場が形成され、そこが大仏殿造営においても各地から集められた材木の中間集積地として機能していたことを示している。天満は、尼崎や堺と並んで豊臣政権の材木調達を支える重要な役割を果たすとともに、前述の通り、プレハブ工法により寺社建築の造営を担う基地としての役割も担っていたとすることができる。

### (3) 中近世移行期における寺社建築の変容(=近世化)

本研究では、豊臣政権の寺社造営の特質や意義をより広い視野から論じるとともに、中近世移行期における寺社建築の変容の特色を明らかにするため、寺社建築の平面形式・構造形式・架構に注目してその変容について分析を加えた。具体的には、豊臣政権の蔵入地が所在した播磨国をとりあげ、中世から近世にかけて造営された正面柱間が五間以上の大規模な仏堂31棟について考察を行った。

平面形式について 五間堂の平面はつぎの4形式に分類できた。なお、七間堂も同様の考え方で分類することができる。

- I 正面三間・側面二間の内陣身舎部分の前方に、正面五間・側面二間の礼堂身舎部分を配する( -㉓ )、または前方に正面三間・側面二間の礼堂身舎部分を配して四周あるいは礼堂身舎部分の正側面に庇を廻らせる形式( -㉔形式 )
- II 正面三間・側面二間の内陣身舎部分の前方に、正面三間・側面一間の礼堂身舎部分を配し、その四周に庇を廻らせる形式
- III 正面三間・側面二間の内陣身舎部分の四周に庇を廻らせる形式
- IV その他の形式

31棟の仏堂のうち、七間堂はすべて 形式をとり、五間堂は時期を問わず ~ 形式をとっている。さらに、 形式のうち㉔は中世から近世にかけて広く確認できるのに対し、㉓は17世紀に集中していることが判明する。したがって、播磨国では時代が下るにつれ、㉓の平面形式が主流となったとすることができる。

礼堂の架構について 七間堂では中世・近世を通して、正面五間・側面二間の礼堂身舎部分の正側面に庇を廻す形式が一般的であり、身舎部分には虹梁を架ける場合と、組入天井を張る場合がある。また、庇では、いずれも身舎柱・庇柱間に繫虹梁、あるいは繫海老虹梁を架ける。

五間堂では、 形式の場合、㉓は身舎部分の奥行方向に虹梁を架けることが多く、㉔は身舎部分に虹梁、庇に繫虹梁を架けることが多い。それに対して、 形式の場合、身舎部分正面の柱を省略し、大虹梁を架けるものが多くみられた。いずれの架構も中世・近世の時期的な区別なく採用されており、礼堂の架構方式については時代的な変化は確認できない。

仏堂の近世化 中世から近世に移るにしたがって、中世的な特徴が失われ、大きく変化する部分もあった。平面については、中世には内外陣とも身舎部分と庇との空間的な区分が明確であるのに対し、近世になると内陣身舎部分と脇陣との空間的一体化が図られる例がみられる。また、内陣と脇陣を区分する場合は、脇陣側面に付いた縁を脇陣内に取り込み、脇陣が拡張される事例も確認できる。

さらに、架構については、内陣の架構の省略、礼堂の架構の省略と天井の付設が行われる。上述のように、内外陣ともに架構を架ける事例は近世を通してあるものの、近世には架構をみせない穏やかな空間を指向する傾向をみいだすことができる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 登谷伸宏	4. 巻 698
2. 論文標題 秀吉政権と東山大仏殿の造営	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本史研究	6. 最初と最後の頁 3-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計2件

1. 著者名 山岸常人編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 和多山西仙寺 和多眞乗	5. 総ページ数 109
3. 書名 西仙寺本堂建造物調査報告書	

1. 著者名 国立大学法人 京都工芸繊維大学	4. 発行年 2022年
2. 出版社 真宗大谷派（東本願寺）	5. 総ページ数 263
3. 書名 真宗本廟（東本願寺）飛地境内地建築群総合調査報告書 大谷祖廟・高倉会館・涉成園	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------